

## Paradise Lostにおける「罪」の成立

鍋, 琴美

九州大学大学院人文科学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6789506>

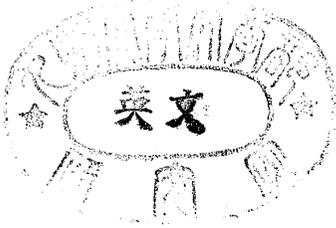
---

出版情報 : 九大英文学. 44, pp.1-16, 2001-12-01. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :





## ***Paradise Lost*における「罪」の成立**

鍋 琴美

### 序

ミルトンの *Paradise Lost* は、創世記第三章に描かれている人間の墮落、そして楽園からの追放を題材とした作品である。このもとの題材は非常に短く簡潔であるが、ミルトンはそれを独自の価値観でもって壮大な叙事詩に仕立て直した。本作品において特に注目すべきは、墮天使セイタンとアダム・イヴの二様の「罪」の描写である。伝統的なキリスト教の教義を重視し、受け継いだミルトンは、その『キリスト教教義論』の中で、「罪」について次のように定義している。

SIN, ... [is] “the transgression of the law,”.... By the law is here meant, in the first place, that rule of conscience which is innate, and engraven upon the mind of man; secondly, the special command which proceeded out of the mouth of God....<sup>1</sup>

すなわちミルトンによると、「罪」とは「法の違反」であり、その法とは、まず第一には意識における天賦の法を、そして第二に神の口から発せられた特別な命令を意味するものである。

ここで、「罪」の概念のキリスト教的伝統について触れておきたい。17世紀のイギリス文学に多大な影響を与えたアウグスティヌスは、キリスト教思想において基礎となる、決定的な「罪」の定義を次のように示した。

... sin is any action, word, or desire against the eternal law, the divine order, or the will of God – all of which man must acknowledge by the exercise of reason enlightened by faith.<sup>2</sup>

アウグスティヌス神学において、「罪」とは、永遠法や神の秩序、神意に反するあらゆる行為や言葉、欲求を指す。そして人間は、信仰によって照らされた理性の働きによって、神の秩序を知ることができる、というものである。基本的に「罪」とは神への背反であるとするアウグスティヌスの考え方は、伝統的キリスト教神学に則るミルトンの神学においても踏襲されている。

では、ミルトンの『キリスト教教義論』に示された、神の命令に対する違反としての「罪」の概念は、*Paradise Lost* という文学的コンテクストにおいてどのように表象されているのか。本稿では、*Paradise Lost* における「罪」の性質と意味について、アダムとイヴ、そしてセイタンの両者の「罪」を比較検討することによって、本作品における「罪」の実体を明らかにすることを目的とする。そして最終的に、ミルトンの考える「罪」と人間存在の意義との連関を解明したい。

## I

本作品第Ⅱ巻において、「罪」は上半身美女、下半身は鱗に覆われた蛇、という異形としてアレゴリカルに描かれる。ミルトンは、このように「罪」をアレゴリカルなキャラクターとして示し、「罪」の概念をヴィジュアルに表している。そうすることによって、「罪」ということばが含有する漠然とした概念を、読者に分かりやすく伝えている。

「罪」の起源は、天国において神への反逆を企むセイタンの“pride”（傲慢）にある。「罪」がセイタンの左頭から生まれ出る様子は、知恵の神アテナの誕生の悪しきパロディである。<sup>3</sup>さらに、「罪」はセイタンと通じ、「死」が生まれる。この「罪」と「死」というキャラクターは、セイタンが天国において犯した観念的な「罪」の概念と、アダム・イヴの「罪」すなわちこの世の肉体的な「罪」の概念との間の橋渡しの役割を担っている。ミルトンの

『キリスト教教義論』においても、アダムとイヴの犯した「原罪」は、セイタンの誘惑によって生じた一度きりのものであったが、その「罪」への悪しき欲望はその子孫の中に内在化し、この世の全ての「罪」の原因となるという基本的概念を確認している。<sup>4</sup> アダムとイヴの「原罪」によってこの世にもたらされた「罪」の数々は、『キリスト教教義論』において以下のように列挙されている。

... unbelief; ingratitude; disobedience; gluttony; in the man excessive uxoriousness, in the woman a want of proper regard for her husband, in both an insensibility to the welfare of their offspring, and that offspring the whole human race; parricide, theft,...<sup>5</sup>

*Paradise Lost* の文学的コンテクストにおいて、ミルトンはこの現世的な「罪」の数々がそのアレゴリカルな「罪」と「死」によってこの世に生起する様子を描いている（第X巻）。『キリスト教教義論』においては観念的に議論される「罪」の実体が、本作品においては形象的、視覚的に示されることにより、にわかに現実味を帯び、その *secular* な性質を強調する。さらに、それぞれの存在の根拠が深く関わり合いを持つものとして描かれているセイタンとその娘「罪」とその子ども「死」の関係から、これらの実際的な「罪」が全てセイタンの観念的な「罪」から派生したものであることが示される。ここにおいて、セイタンが神に反逆することによって天国において犯した初めの「罪」は、単に天上的・観念的なものに留まらず、アダムとイヴの「原罪」を通して、最終的には地上にも影響を与えたものとして明確に伝えられる。

アレゴリカルな「罪」と「死」の持つ性質もまた、天上的な「罪」の概念を地上の実際的な「罪」に結びつける働きをする。「罪」はその醜悪な性質が特徴的に描かれているが、ここにおいて特に強調すべきは、その「罪」と「死」の近親相姦による妊娠・出産という形でもって描かれる、「罪」というキャラクターの持つ増殖性<sup>6</sup>である。ミルトンは、現世的悪徳の数々を、近親相姦

によって「罪」から生まれ続ける胎児たち、というメタファーを用いて表現することにより、セイタンの娘「罪」の持つおぞましい増殖性と、この世に蔓延する実際的な「罪」の在り様を示している。ミルトンは「罪」という概念を単に神学的、観念的事柄として扱うに留まらず、メタファーの連続によってアレゴリカルに、あるいはヴィジュアルに提示し、「罪」の概念の持つ人間的・現世的性質を特に強調しているといえる。

## II

ミルトンの描く「罪」に見られる二つのアスペクト、すなわちその人間的、あるいは世俗的性質と、観念的、天上的な面のうち、セイタンによって表象されるのは后者である。セイタンの犯す「罪」は、観念的なレベルから出発する。セイタンは元来、天国において高い位に属する天使ルシファーであり、権力、神からの寵愛、名誉において偉大な存在であった。しかし傲慢に、自分を創造した神への服従を拒否し、反逆する。この瞬間、即ち神の定めた天国における自分の地位を拒絶し、神意に背くことにおいてセイタンの「罪」が成立する。その「罪」の原因は、彼の内面に発生した“pride”（傲慢）である。したがって、セイタンに誑かされ、外からの働きかけがあって成された人間の「罪」とは対照的に、セイタンの「罪」は内発的、内在的である。

*Paradise Lost* において、セイタンの傲慢は、彼自身の内部において増幅され、留まるところを知らないものとして描出される。自らの力を過信し、出口のない「悪」の循環構造にはまったセイタンの心は、「閉じた」構造を持つものとして解し得る。17世紀のキリスト教文学に多大な影響を与えたアウグスティヌスはその『三位一体論』において、魂が絶対的な神に服従する代わりに、自己の力を試そうとする欲望を追求しようとする時、神の罰を受け、人間の存在は獣並みの最低レベルに追い落とされる、と述べる。<sup>7</sup> 自己の力を志向の対象として措定する魂の在り様は、自己完結的な「閉じた」構造を持つものである。*Paradise Lost* において「罪」を犯すセイタンら墮天使たちの心もこれと同じ構造をその内部に有するといえる。墮天使マンモンのスピーチにおける、「神の善に頼るのではなく、自らの善きものにのみ頼って地

獄で自主独立の生活を送ろう」(“but rather seek / Our own good from ourselves”, II, 252-53)<sup>8</sup>という発想は、墮天使の特徴的な「閉じた」精神状態を反映している。このようにセイタンら反逆天使たちは、全き善であり創造主である神に向かって心を開くことなしに、自己の内部にのみ目を向け、自らの存在の根源、根拠を自分自身という「閉じた」構造の中に求める。

この状況は、第IV巻におけるセイタンの悲痛な独白によって、その構造的欠陥を露呈する。眼前に楽しげに広がるエデンに向かい、いざ、人間を墮落させる企てを実行に移そうとするセイタンだが、その心中深く隠れていた「良心」(“conscience”, IV, 23)が頭をもたげ、彼の心は「内なる地獄」(“The hell within him”, IV, 20)と化す。ただし、ここでいう「良心」とは、現実逃避することなしに自分の置かれた状況を判断する冷静な目、といった程度のものであり、道徳的な価値判断からくる、自分の行為に対する良心的反省などとは無縁である。<sup>9</sup>自己の置かれた惨めな境遇を自覚し得る覚めた心によって、絶望が呼び覚まされたセイタンは、かつて自分が享受していた栄光からの転落を悔やみ、自分の今の状況がいかに惨めなものであるかを切に感じ、今後その状況はさらに悪化するであろう、と苦悩する。惨めさの極まったセイタンは心の底から叫ぶ—

Me miserable! Which way shall I fly  
 Infinite wrath, and infinite despair?  
 Which way I fly is hell; myself am hell;  
 And in the lowest deep a lower deep  
 Still threatening to devour me opens wide,... (IV, 73-77)

すなわちセイタンは、どこにいても無限の怒り、絶望から逃れることは出来ない。この悲惨な状況において、彼は自分自身の存在論的地獄性(“myself am hell”)を認識せざるを得ない。さらに、このセイタンのことばは、彼の自己矛盾を暴露している。すなわち墮天使たちは、自己存在を高め、より確固としたものとするために、自ら神に対する背反を求めたはずであった。にもかかわらず、そうすることによってかえってセイタンは逃れ難い自己存在の危機

に直面することになっている。この自分自身に向けられたセイタンの叫びは、自分の置かれた悪しく成りゆく状況に対する自己認識に他ならず、このように、「閉じた」心は自らその破綻を露呈する。

では、自己存在の更なる向上、そして神の如き存在の充実を求めたはずの墮天使たちは、なぜそのような自己矛盾に陥ってしまったのであろうか。それは、*Paradise Lost*において「悪」が非存在として描かれていることに関係する。<sup>10</sup> セイタンとアレゴリカルなキャラクター「罪」との間に出来た子ども「死」は、実体を持たぬ影の如き存在として描かれ(II, 669-73)、この意味で「死」の父である、セイタンもまたその非存在の性質を持つものと考えてよい。セイタンの心の内部においては、全ての「善」は失われ、「悪」が「善」に取って代わっている。<sup>11</sup> *Paradise Lost*の神学的原理において、魂は「善」を志向すべきものとして定められているが、セイタンは「悪」を志向し、自らがその「悪」の主体となってゆく。ここにおいて、前述のセイタンの実体の寄る辺なさや「悪」がつながり、*Paradise Lost*の世界における「悪」そのものの非存在性が浮き彫りになってくる。

「悪」のその非存在性は墮天使たちの容貌にも表象される。彼らは、その身は破滅してしまったとはいえ、容貌には天使的な「威厳ある分別」(“princely counsel”, II, 304)や「徳」(“virtue”, II, 483)が残っている。しかしそれは、ミルトンの描く墮天使像を決してヒロイックなものにはしない。セイタンの英雄的な発言には常にアイロニーが伴う。セイタンはロマンティックの読者とは異なり、ミルトン神学においては明確にアンティヒーローであり、読者の共感は全く期待されるものではない。<sup>12</sup> 墮天使たちの栄光の残照も、彼らのかつての栄光を示すのではなく、反逆に対して与えられた罰とその惨めさを強調するのみである。墮天使たちは、あくまで「悪」を志向することによって、「悪」に先立って存在していた「善」から転落した存在であり、見かけにおいては不完全な「善」を所有する、歪な存在なのである。このように *Paradise Lost* においては、「悪」はそれ自身は実体を持たない非存在であり、「善」という先行物があって、それからの転落という形で初めて現れて来るものである。

神に反逆したセイタンらは、「悪」を求め、その主体になろうとすればする

ほど、かえって自分を空しいものにしてしまう。その原因は、非存在である「悪」を欲求の対象として措定したことである。彼らは自己存在の充実を求めゆき、逆に自らの存在の内に何らかの形で非存在の性質を刻み込むこととなる。したがって、彼らの「閉じた」魂は、絶望以外の何ものも生み出さず、そこには何の発展の可能性もない。換言すれば、「閉じた」魂の場とは、非生産的な「悪」の循環構造と仮定することができよう。セイタンは何も産み出さない「閉じた」構造の中で永遠に苦しみ続ける。それとは対照的に、セイタンと同様の「閉じた」心で「罪」を犯す人間は、最終的にはその「悪」の循環構造を断ち切り、新たな方向へと発展してゆくこととなる。

### III

*Paradise Lost*において、セイタンの「罪」の成立過程と比較して、より複雑な手順をふむ人間のそれは、二つの段階に分けて考えられる。まず、その第一段階として、イヴが、神の与えるであろう罰を思い至らないで、感覚的に「罪」を犯す。次に第二段階として、アダムがイヴの行為を「罪」であると知りながら、理性的に「罪」に対して同意を与える。

蛇に化身するセイタンはまず、感覚にうたえることによってイヴを誘惑する。人間の「罪」成立の端緒となったイヴの墮落は、直接的に、ではなくこの蛇という媒介を通して成立したものである。天使からの忠告を受けて慎重になっているアダムの制止を振り切って、一人で仕事に出かけたイヴに出会った蛇は、「愛を装った憎しみ」(“Hate stronger, under show of love well feigned”, IX, 492)のことば、すなわち悪意を秘めた追従でもってイヴに話しかける。蛇のお世辞は、イヴの心の中に「深く食い込む」(“Into the heart of Eve his words made way”, IX, 550)。自分を美しい“universal dame” (IX, 612)と崇める蛇のことばに理性を失うイヴは、「警戒の念をゆるめ」(“unwary”, IX, 614)、その無垢な心に悪が入り込む隙を作ってしまう。

とりわけ、「この実を食べても死にはしない。もし死ぬといっても、それは神性を身に付けるために人間性を捨てるという意味においてであるから、心配は要らない。」という蛇の巧妙な偽りの論理は、決定的に彼女を墮落させる。

He [Satan] ended, and his words replete with guile  
 Into her heart too easy entrance won:  
 .....  
 ... and in her ears the sound  
 Yet rung of his persuasive words, impregned  
 With reason, to her seeming, and with truth; (IX, 733-38)

理性を失わされたイヴは、蛇のこぼを“reason”と“truth”を伝えるものとして聞く。終に、蛇を「信頼できる情報提供者者」(“author unsuspect, / Friendly to man”, IX, 771-72)だという誤った判断を下したイヴは、神に与えられた理性を働かせることに失敗したために、その罰を受けねばならない。イヴの墮落の過程で、この点が最も皮肉な部分である。すなわち、イヴが蛇の甘言によって理性を失った結果、神の与えるであろう罰、すなわち死について熟慮することが出来なかった点である。その結果、彼女は感覚的に、すなわち欲求のおもむくままに神に禁じられていた行為をするに及んだ。ミルトンはここで、イヴの理性の喪失が、洞察力、判断、見通し、知識等の重要な人間の能力を無に帰せしめる深刻な「罪」であることを明確に示している。人間の「罪」は、これら全ての能力の不発動において生じ、その「罪」の発生にイヴが考え至らなかったことは、人間の不完全を示すものである。

一方アダムは、イヴの行為が神からの背反であるということを認識しながら、イヴへの愛情のために、「故意に」罪を軽く見る。そして、そのイヴに同意を与えることによって、神からの背反すなわち「罪」それ自体を理性的に承認するという、更なる「罪」を犯す。アダムの過ちは、あるいは「罪」ではないという解釈もある。しかし神学的には、アダムは、イヴが神の禁制を破り、「罪」を犯し、今や死の呪いを受ける身であることには十分に気付きながら、「罪」の行為自体をあえて軽く見積もるといった誤った判断を犯していることになる。

... perhaps the fact

Is not so heinous now,...

.....  
Nor can I think that God, creator wise,  
Thought threatening, will in earnest so destroy  
Us his prime creatures, dignified so high,  
Set over all his works,... (IX, 928-41)

アダムは、愛するイヴの行為が“heinous”なものであるとはとても思えない。さらに彼は、「賢い」創造主が「自分の最高の被造物」(“his prime creatures”)を本気で滅ぼすかもしれないという厳しい現実に対してもわざと目を閉ざす。そして、イヴが件の果実をアダムの与えると、イヴへの愛のために、彼の中に備わっていた理性の働きとも言うべき「己の善き知識」(“his better knowledge”, IX, 998) に逆らってその実を食べる。

セイトンの「罪」に見られた「閉じた」構造は、蛇を媒介として、アダムとイヴの「罪」の成立過程においても受け継がれている。すなわち、「閉じた」魂とは、神以外のものを志向の対象として措定するものであったが、アダムは妻への愛情のゆえ、またイヴは感覚的なものに対してのみ心を向け、神から心を「閉ざし」ている。同じ「閉じた」魂の状態にあっても、人間の「罪」の成立過程においては、アダムの方が圧倒的に「罪」の責任が重いと思われる。なぜならば、墮落したイヴを前にしてもアダムにはまだ神に与えられた内なる理性が残っており、理論的には、もしそれを正しく働かせたならば、感覚を暴走させたイヴを止めることができたと考えられるからである。それにもかかわらず、アダムは故意に理性を曇らせ、自分の存在全体が関わるようなやり方で「罪」に同意を与える。このようにして成立した「原罪」は、神の命令に反するイヴの申し出を抑制・拒絶せずに、神への背反、すなわち「罪」自体に同意を与えたアダムにおいて、完全に成立したといえる。ここにおいて、「罪」はもはや事故のように一過性のものではなく、何らかの形で人間存在の本性を形づけるものとなる。そして、ミルトンの考える人間存在とは、「罪」の成立におけるこのイヴの要素とアダムの要素の複合体として考えられよう。

#### IV

セイタンと人間が「罪」を犯す時の「閉じた」魂の状態は、「内的秩序の転倒」の観点から捉えることができる。*Paradise Lost*において、宇宙に秩序をもたらしたのは神である。神の創造の業を真近に見た天使ウリエルは、天地創造の様子を次のように物語る。

I saw when at his word the formless mass,  
This world's material mould, came to a heap:  
.....  
Till at his second bidding darkness fled,  
Light shone, and order from disorder sprung: (III, 708-13)

神のことばに応じて、この宇宙の形なきものが、一つの形ある塊として集まる。そして、やがてまた神の「命令」が発せられると、“disorder”から“order”が踊り出る。ウリエルのこの語りは、無秩序の混沌とした宇宙から秩序ある世界を作り出した神の創造の様子を的確に表現している。

神の作った秩序が支配しているエデンにおいて、人間もまた、その秩序を内的に有する存在として造られている。人間の創造について語る神の言葉において、人間は他の生き物が「常に下を見、道理をわきまえない」(“prone / And brute”, VII, 506-07)のとは対照的に、「聖なる理性」(“sanctity of reason”, VII, 508)を持ち、「背をのばして直立し」(“erect / His stature”, VII, 508-09)、他の動物たちを支配する存在である。<sup>13</sup>さらに人間は、徹底した自己知に裏打ちされた深い信仰と、自分の持つ善きものは全て神から来たことを知り、感謝する心を保持すべく造られている。

しかし、エデンにおいて、人間が「罪」を犯した時、その高みへと向かうべき精神の働きは機能していない。イヴは、心を天的なるものではなく、自己の欲求に向けることによって、また、アダムは美貌の妻への情熱に執着し、イヴを自分の価値基準に置換することによって、神に作られた自己の内的秩

序を転倒させてしまう。

エデンにおける秩序の転倒という問題を考える際に、セイタンの果たした役割の大きさを見落とすわけにはいかない。セイタンは、天国においては高位の天使であった。そして、墮落した後も、一面、天使の栄光のおもかげを持つ存在である。それにもかかわらずイヴへの接近においては、口から入り、心臓か頭にあったその動物としての感覚を奪い取る、というグロテスクなやり方で低級な蛇と一体化し、自分を獣化させる。このセイタンの変身は、エデンにおける価値秩序の崩壊を暗示する。<sup>14</sup>

Oh foul descent! That I [Satan] who erst contended  
 With gods to sit the highest, am now constrained  
 Into a beast, and mixed with bestial slime,  
 This essence to incarnate and imbrute,  
 That to the height of deity aspired;... (IX, 163-67)

かつては神々と同等か、と思われた身が、今や獣化の憂き目に遭っている。セイタンは、「無残な転落」(“foul descent”, IX, 163)という状況を完全に認識し、打ちのめされている。一方、心中においては、悔い改めて神に服そうとする思いよりも、神に対する“revenge”(IX, 168)に燃える。全ての善が悪に取って代わってしまった彼の内部においては、本来、善すなわち神へと向かうべきベクトルが、完全に反対の、悪の方へと向かっているのである。このセイタンの「内的秩序の転倒」は、人間の「罪」よりも先に起こっていたものである。セイタンは自己の獣化により、その転倒をエデンの中に持ち込む。神によって正しく秩序付けられていた楽園が、それまでその世界には存在しなかった秩序の転倒を経験することで、秩序転覆の可能性を内包することになる。そこにおいては、既に、アダムとイヴの墮落に先立ち、既存秩序の転覆のパターンが予示されている。

## 結 び

「罪」を犯し、墮落した後のセイトンと人間を比較した時に、人間にのみ見られる特徴が、神の許しとどのように関わってくるのであろうか。そして、ミルトンは「罪」を人間存在にとってどのようなものとして考えていたのであろうか。

セイトンら墮天使たちは、「罪」をおかした後も、自己という「閉じた」構造から出ようとせず、“pride”の「罪」から永久に脱しきれない。セイトンは天国を“our native heaven” (X, 467)と呼ぶが、その言葉にノスタルジーの響きは感じられない。あくまでも、もはや自分からは完全に失われてしまった過去の栄光にすがりついているだけである。彼は、天国の奪回、そしてそこへの帰還を希求する一方、地獄からの上昇の難しさについて次のように言及する。

... long is the way

And hard, that out of hell leads up to light; (II, 432-33)

これは、地獄を脱して上昇し、人間界まで探索に行く困難さについて語る文脈の中のことばである。しかしながら、これは単に物理的な上昇の困難さについて述べているのではない。前述のセイトンの「私自身が地獄だ!」ということばからも分かるように、これは、地獄そのもの、すなわち「悪」そのものである自分自身から脱して、神の善へと向かう困難さを表しているものと解せよう。セイトンは、絶対的な存在者に対して心を開き、自己の転倒した欲求を否定し、より善き道すじを求め行くことよりも、閉じた自己の内部で肥大した欲望のおもむくままに身を投じる道を選ぶ。

この地獄的状况を典型的に示す場面の一つは、見た目には美しいが、実は苦い灰で出来た果実を墮天使たちが貪り食う、タンタロスの状況である(第X巻)。彼らは、空腹と渇きを満たそうとこの実を食べる。そして、食べてはそのあまりの苦さに吐き出し、また食べる、を繰り返す。さきに私は、セイトンら墮天使たちが「悪」そのものを求め、自らの存在を確固としたものに

しようとして、かえって己の身に非存在の性質を刻み込んでしまったことについて述べた。この苦い灰の実の描写は、その墮天使たちと「悪」との関わりを想起させる。すなわち、この灰の実は、いくら求めても自分の存在に充実を与える力を持たない、「悪」そのものを象徴している。墮天使は、「閉じた」自己の内部における終わりなき「悪」の循環構造にはまってしまい、そこから抜け出すことも、自己を何らかの形で発展させることも出来ない。

ミルトンは、このようにして「悪」の循環構造の中で疲れ果てる墮天使たちの様子を、「彼らに征服されて一度だけ過ちを犯した人間とは違う」(“not as man / Whom they triumphed once lapsed.”, X, 571-72)と明示している。すなわち、人間はその墮落を一度きりのものとし、「悪」の循環構造を断ち切る。ミルトンは本作品終結部において、墮落の当事者であるアダムへの苦悩を描くことによって、「罪」を、人間存在の根本に関わる倫理的な問題として示している。罪の重みに耐えかねたアダムは、神に対し、自分を創造したこと自体について不平を言う。

Did I request thee, Maker, from my clay  
 To mould me men, did I solicit thee  
 From darkness to promote me, or here place  
 In this delicious garden? As my will  
 Concurred not to my being, it were but right  
 And equal to reduce me to my dust,... (X, 743-48)

「自分は土から自分を作って欲しいなどと頼んではいけない、自分が生まれてくることに同意などしていない、それなのになぜ自分を作ったのか。」とアダムは自己存在の根拠を激しく問う。ここにおいて描かれている「罪」を犯した後の人間の心の葛藤は、神学では十分に表現し得ない部分である。セイタンの「罪」には見られなかった、このような心的葛藤、そしてそれに続く内省は、人間にとって自己追究の契機となる。そして自己内部を深く見つめ直した人間は、理性を復活させ、神との契約関係に立ち戻り、失われた自己の再生の道へ入る。

エデンからの追放を言い渡された人間にとって、エデンは「故郷」(“native soil”, XI, 270)となる。墮落以前の人間はエデンにおいて神の存在に直接的に触れることが出来た。しかし、人間はもはやその場所に住むことは許されない。最後にエデンを振り返り見るアダムとイヴの目から落ちる涙は、「郷愁の涙」であるといえよう。人間は外の「世界」で生きてゆかねばならないが、記憶の中に存在し続ける彼らの楽園に、そしてそれが象徴する失われた善に思いを馳せることは出来る。ここにおいて人間は、内省によって、既に失われてしまった善の象徴である楽園へのノスタルジアへ向かう、という、積極的で方向性を持つアイデンティティを獲得するに至る。すなわち逆説的に、人間にとって墮落は新しいアイデンティティ獲得のきっかけとなったといえよう。<sup>15</sup>

ミルトンは、人間の「罪」を、人間存在にとってマイナス要因だとは見なしていない。すなわち彼は、人間の「罪」を、人間の本性と切り離すことの出来ない「不可欠要因」<sup>16</sup>として捉えているのだ。なぜならば、自由な意志を持つということは、常に頹落の可能性に晒されているということと両義的だからである。しかし逆説的に、そのような絶えざる精神の緊張状態に置かれた人間は、「罪」の可能性と同時に、アイデンティティ形成の可能性にも豊かに開かれていることが示唆されている。人間はたとえ墮落を体験したとしても、その自由な意志によって、セイタンのように傲慢を捨てきれず「閉じた」自己の中に沈臨することなく、神へと心を開き、より善き方向に向かい発展することが出来る。これを *Paradise Lost* は、その冒頭から一貫して最も重要なテーマとして明確に示しているといえる。そのテーマの方向性は、下降からの上昇、そしてさらなる発展、という「動的」なものである。

## 註

1. John Milton, *De Doctrina Christiana*, in *The Works of John Milton*, ed. Frank Allen Patterson, vol. 15 (New York: Columbia University Press, 1933) 179-81.
2. William B. Hunter, Jr. ed., *A Milton Encyclopedia*, vol. 7 (London: Associated

- University Presses, 1979) 201.
3. *A Milton Encyclopedia*, vol.1, 38.
  4. *A Milton Encyclopedia*, vol.7, 201.
  5. *De Doctrina Christiana*, vol.15, 181-83.
  6. この「絶えざる増殖性」に加えて、Lewalski は「罪」というキャラクターの持つ、「倒錯した自己愛」、「自滅的性質」にも注目している。(Barbara Kiefer Lewalski, *Paradise Lost and the Rhetoric of Literary Forms*, [Princeton: Princeton University Press, 1985], 68-69.)
  7. Saint Augustine, *The Trinity*, trans. Edmund Hill, ed. John E. Rotelle (New York: New City Press, 1991) 331.
  8. John Milton, *Paradise Lost*, ed. Alastair Fowler, 2nd ed (New York: Longman, 1998).テキストは以下特に断らない限りこの版に拠るものとし、本書からの引用は論文中に括弧内の数字で巻数と行数を記す。
  9. Lewalski は悲劇の伝統に基づいて、セイタンにも良心の呵責があるという指摘をしたが、本稿においては、セイタンにおける道徳的良心の存在を認めず、セイトンの「良心」を「自己催眠の解けた冷静な心」として解釈した。(Paradise Lost and the Rhetoric of Literary Forms, 63)
  10. Fallon は、Paradise Lost における「悪」を「非存在」として示している。(S. M. Fallon, *ELR*, 17 [1987], 329-50, [Alastair Fowler, p.143.の註による。])
  11. セイタン自身の “all good to me lost; / Evil be thou my good;” (IV, 109-10) ということばに拠る。
  12. Fish は、本作品冒頭におけるセイトンの力強く、逆境における大胆な自信とリーダーシップにあふれたスピーチを取り上げ、それに続く以下の詩人のコメントに特に注目し、論じている。

So spake th' Apostate Angel, though in pain,

Vaunting aloud, but rackt with deep despair. (I, 125-26)

Fish によると、セイトンのスピーチの直後に彼の英雄的な力を弱めるようなコメントを付加することによって、ミルトンは読者の反応を複雑化し、曲げようとしている、という。(Stanley Eugene Fish, *Surprised by Sin: the Reader in Paradise Lost*, [Los Angeles: University of California Press, 1971], 4-5.)

13. アウグスティヌスは、人間にのみ与えられた「身体の直立性」(“upright posture”)を、人間の霊的・精神的な高さを象徴するものとして解釈する。

But just as our body is raised up by nature to what is highest in bodies, that is, to the heaven, so our consciousness being a spiritual substance should be raised up toward what is highest in spiritual things – not of course by the elevation of pride but by the dutiful piety of justice. (*The Trinity*, 322.)

14. Chambers は、セイトンの獣化を、神の定めた楽園の秩序が転倒する契機として捉え、次のように指摘している。: “[The true order of Paradise] is threatened when Satan incarnates the snake, that normal symbol of the potential concupiscence within Adam and Eve and the archetype for those inordinate motions that have afflicted man ever since.” (A. B. Chambers, “The Falls of Adam and Eve in Paradise Lost”, *New Essays on Paradise Lost*, ed. Thomas Kranidas, [Berkeley: University of California Press, 1969], 130.)

15. 新井は、人間の犯した「罪」を伝統的にキリスト教文学に継承され続けた「幸いの罪」として捉える考え方を退け、一度は墮落によって絶望を味わった人間が、「墮落以前には体験し得なかった救済の希望の自覚」を与えられたことが人間にとっての「喜び」となった、と述べている。本稿における「罪」の捉え方も、「罪」の肯定的な面のみを特に強調するものではない。(新井 明、『ミルトンの世界—叙事詩性の軌跡』[東京：研究社、1980], 219-34.)

16. 坂本は、ミルトンの原罪に対する考え方について、「アダムとイヴが犯した原罪は、彼らの自由意志にもとづく選択の結果」であり、「人間が自らの意志によって神と言う絶対者の意志に背いたところに原罪がある」と述べている。そしてさらに、ミルトンの描く人間の「罪深さ」は「人間が人間であることの不可欠要因」であり、「決定的な負の要因」ではない、という見解に至っている。(坂本 清音、「ミルトンとバニヤン—クリストファ・ヒルの視点を通して—」, 51-52、永岡 薫・今関 恒夫編、『イギリス革命におけるミルトンとバニヤン』, [東京：御茶の水書房、1991] 所収。)